

要旨

(タイトル) 抽象概念を表す漢語名詞に付随する意味的韻律

「物質」や「行為」など、概念体系の最上位に位置し、もっとも抽象的な概念を表すと考えられる漢語名詞の、大規模コーパスにおける使用状況を調査した。論理的に考えると、これらの抽象概念を表す名詞は、下位概念すべてを包含するはずであるから、意味的に透明、あるいは中立的に用いられてしかるべきである。しかし調査結果は、全く予想に反するものであった。

たとえば、「行為」の直前に共起し複合名詞を構成する名詞を頻度順に並べると、「不法」(204)、「違法」(143)、「違反」(133)、「性」(119)、「争議」(98)、「暴力」(95)、「不正」(72)、「不当労働」(64)、「犯罪」(55)、「不良」(36)、「自殺」(33)、「残虐」(31)、「暴走」(31)、「テロ」(29)、「逸脱」(28)、「加害」(21)、「不貞」(19)、「海賊」(18)、「迷惑」(18)など、否定的な意味合いを持つ語がずらりと並ぶ(カッコ内の数値は出現頻度)。さらに、同じことが、名詞だけではなく、形容動詞についても言える。頻度上位には、「不当な」(20)、「違法な」(14)、「危険な」(13)、「わいせつな」(9)、「愚かな」(6)、「野蛮な」(5)、「残虐な」(5)、「悪質な」(5)、「残酷な」(4)、「不正な」(4)、「無謀な」(4)などの語が並んでいる。このように否定的な語彙と共起する傾向は、「行為」のほか、「事態」「状態」など、直感的には中立的なニュアンスを持つ他の語にも見出すことができる。「事態」を修飾する形容動詞の頻度上位には、「深刻な」(33)、「重大な」(20)、「大変な」(15)、「異常な」(14)、「不幸な」(12)、「困難な」(8)、「悲惨な」(6)、「遺憾な」(5)という語が、「状態」にも、「危険な」(42)、「不安定な」(22)、「困難な」(21)、「悲惨な」(19)、「深刻な」(13)、「大変な」(13)、「異常な」(12)という否定的な語が顔をそろえる。

一方、「物質」と共起し、複合名詞を構成する名詞の頻度上位には、「化学」(487)、「放射性」(193)、「有害」(166)、「抗生」(131)、「汚染」(128)、「伝達」(118)、「核」(98)、「燃料」(80)、「粒子状」(55)、「原因」(50)、「規制」(42)、「原料」(20)、「汚濁」(18)などの語が並ぶ。「抗生物質」や「神経伝達物質」など、医学・化学分野で用いられる専門用語を除いて、多くは人体への悪影響を含意する物質を表す語である。「物体」も、頻度は少ないものの、「巨大な」(2)、「無機質な」(1)、「邪魔な」(1)、「奇怪な」(1)、「異様な」(1)、「純粋な」(1)、「不気味な」(1)という形容動詞によって修飾されている。

以上述べたような、抽象的な語に付随する否定的な含意をもたらし要因として、次の3つが考えられる。一つは、「性行為」「排泄行為」などの婉曲表現である。これらは、具体的な表現が社会的なタブーとされるために、あえて情報を与えないように、抽象的な上位概念を表す語が用いられるものである。ただし、数はそれほど多くない。二つめは、「異常事態」「緊急事態」のように、特別な状況こそ伝える価値があるのであって、定常状態については、情報的な価値がないという語用論的な要因である。工学的情報量の理論を持ち出すまでもなく、普段と変わらない平穏な状態は、特に他人に伝える必要がない。ニュースとして伝えなければならないのは、「異常な」状態であり、人間はこのような異常な事態、予測不可能な事態を嫌うために、否定的なニュアンスを伴う語が多いものと考えられる。三つめは、これらの上位概念の抽象性そのものに起因するものである。抽象的であるということは、情報量が少ないということであり、このような語彙を用いざるをえない状況とは、伝えるべきものについて、話者が十分な情報を持っていない状況である。この、「得体の知れなさ」「わけのわからなさ」が、その物質や事態に対する否定的な価値評価に結びつくものと思われる。

ただし、抽象的な漢語名詞がすべて否定的な含意を持つとは限らない。「活動」は、「経済」(412)、「ボランティア」(328)、「生産」(286)、「事業」(263)、「研究」(237)、「啓発」(185)、「企業」(174)、「広報」(154)、「教育」(153)、「救助」(146)のように、肯定的な語彙とのみ共起している。「活動」は、「行為」とは異なり、計画的に組織された行動のみを表すために、上に述べた異常性や不可解さとは無縁であるということがその理由と考えられる。このように、一見例外と考えられる語も含めて、使用状況の全体像を明らかにした。

・主要参考文献

- ・ 国立国語研究所の言語コーパス整備計画 KOTONoha モニター公開データの内容, Online at http://www.ninjal.ac.jp/kotonoha/ex_8.html. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所.
- ・ Church, K. W., Gale, W., Hanks, P. and Hindle D. (1991) Using statistics in lexical analysis. In U. Zernil (ed.) *Lexical Acquisition* Using On-Line Resources to Build a Lexicon*, Lawrence Erlbaum.
- ・ Hunston, S. and G. Francis (1999) *Pattern Grammar: A Corpus-driven Approach to the Lexical Grammar of English*. John Benjamins.
- ・ Louw, B. (1993) Irony in the text or insincerity in the writer? In M. Baker et al. (eds) *Text and Technology*. John Benjamins.
- ・ Partington, A. (1998) *Patterns and Meanings*. John Benjamins.
- ・ Sinclair, J. (1999) *Concordance Tasks*. Online at <http://www.twc.it/happen.html>. The Tuscan Word Centre.
- ・ Smadja, F. (1993) Retrieving Collocations from Text: Xtract. *Computational Linguistics* 19: 1.
- ・ Stewart, D. (2009) *Semantic Prosody: A Critical Evaluation* (Advances in Corpus Linguistics 9). Routledge.
- ・ Stubbs, M. (1995) Collocation and semantic profiles: On the cause of the trouble with quantitative studies. *Functions of Language* 2:1.